

## 異国日本で「共に生きる」ということ ～ “多国籍タウン” 新大久保に見る（前編）～

日本語教師 うめもと ちさこ  
梅本 千佐子

今年４月はじめ、半年ぶりに東京・新宿区の新大久保駅に降り立ち、人の多さに唖然とした。メインストリートの大久保通りを東に行けば、狭い歩道に人・人・人——。進むのもすれ違うのもスムーズにいかない。皆マスクこそしているが、コロナ禍とは思えない光景だ。若い女性同士やカップルが多い。２回目の「緊急事態宣言」が解除されたし、学校は春休みだし、天気もいいしで繰り出したのだろう。日本語ではない話し声も聞こえてくる。

通り沿いには、ハングルで書かれた看板が目立つ。韓国レストランが立ち並び、スイーツの店、コスメや雑貨、韓流アイドルの店、食材店等々、まるで韓国の町を歩いているかのようだが、むしろ日本のチェーン店やコンビニ、昔ながらの小売店なども点在している。そして、駅をはさんで大久保通りを西に行くと、今度はネパール人やバングラディシュ人などの経営するレストラン、ハラール食材店（イスラム教の教えで摂食が許されている食品や、牛、羊などを戒律に則って屠畜・加工し、認証を受けた食肉等の販売店）、雑貨店、外国通貨の両替屋、国際送金の店、外国人向け不動産屋等々がある。大久保通りの両側にはたくさんの路地があり、韓国、ベトナム、タイ、などのレストラン、カフェなども見られ、「イケメン通り」と称する小路には韓流の様々な店舗がひしめくが、

他の路地には民家やアパートが多く、住宅地であることがわかる。ベランダの洗濯物やゴミ集積場の多言語での注意書きなどから、外国人向けと思しきアパートも見られる。多民族混在の興味深い街だ。

新宿区の外国人住民は「住民基本台帳」によると2021年４月１日現在、124か国36,354人。区の人口344,577人の１割強である。東京都の区市町村在住外国人546,436人の中で最多を占める。中国、韓国、ネパール、ベトナム、ミャンマー出身者だけで28,000人を超えるが、日本語学校や専門学校が新大久保から高田馬場にかけての一带に林立していることから、上記の５か国出身の留学生を中心に、多様な外国人が新宿に集住すると分析されている。中でも新大久保界隈の外国人比率が突出している（第１図、第２図）。

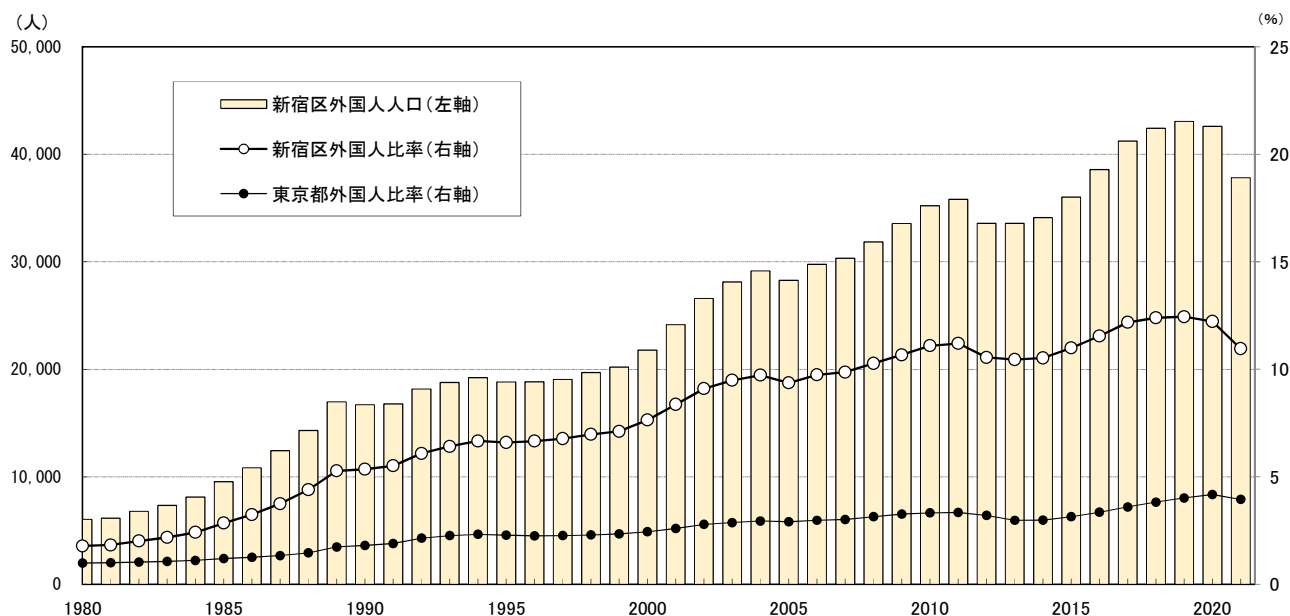
新大久保は2000年代に入って以降の“韓流ブーム”の盛り上がりと共に、“コリアンタウン”の名が浸透したが、ここ数年ベトナムやネパールなどの店が増えつつあり、今や自他ともに認める“多国籍タウン”として発展している。しかし欧米系の店はほとんどなく、ここに住む人も働く人も訪れる人も日本人以外はアジア人が多く、街全体が雑多なアジアの雰囲気漂わせている。

上記のように、留学生など短期の居住者が多い一方、ここで自ら事業を起こし、生活の拠点とす

る定住外国人も増えつつある。少子高齢化が進み、人手不足で外国人材の助けなしには日本の社会活動が維持できなくなりつつある現在、様々な文化

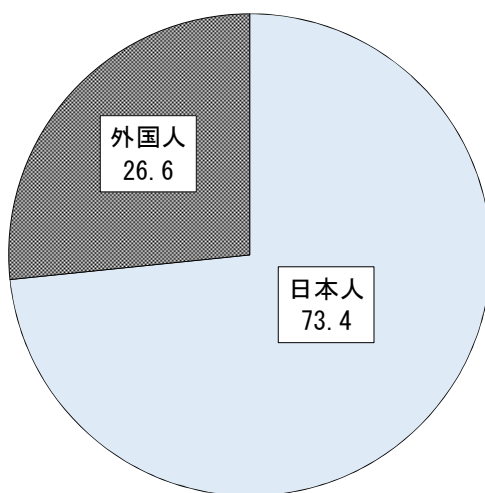
的・社会的背景を持った外国人たちと日本人との円滑な共存は可能か——。他所より一歩先を行くこの町の今を眺めてみたい。

第1図 新宿区の外国人人口と外国人比率



出典) 東京都「東京都の統計 外国人人口 令和3年」、新宿区「第45回 新宿区の統計 (令和3年)」より作成

第2図 新宿区大久保・百人町における外国人比率



(大久保・百人町の人口総数=33,573人)

出典)「第45回 新宿区の統計 (令和3年)」より作成

VS“寛容さがほしい”

私が新大久保に興味を抱いたのは、昨年夏に“多国籍タウン”新大久保のコロナ禍の状況映したテレビドキュメンタリーを見たのがきっかけだ。番組では、この地で100年ほど続いてきた靴店を閉じて、韓国コスメの店をテナントにすることにした日本人オーナーの「“韓流ブーム”の勢いに飲まれてしまい、売り上げが激減してやむなく閉店を決断した。この15年ほどでこの辺りは日本人経営の店が半減してしまった。」との語りや、様々な外国人事業者を取り巻く興味深いエピソードが紹介されていた。

その中で私の目をくぎ付けにしたのは、長らくこの地に住む年配の日本人女性と、その家の隣でカフェを開く若いベトナム人経営者との騒音トラブルの話である。番組では、わずか40㎡の狭いカフェがベトナム人留学生たちのたまり場になっている状況を映し出す。

当事者の一方である住人が「客たちが密集して話し声がうるさい。店の外の狭い路地にもたむろし、夜遅くまで騒いでいる。店側に苦情を申し入れたものの、外のテラス席を引っ込めただけで、騒音自体は少しも改善されていない。以前は問題あるたびに話し合ってきたが、今は挨拶すら交わさない。自宅の敷地に監視カメラをつけて客の公道での振る舞いをチェックし、あまりにひどいときには、パトカーを呼んでいる。“郷に入れば郷に従え”で、外からやってきて日本で商売しようと思う人間はその地のルールをちゃんと守るべきだ。それができないのなら、国に帰ったらどうか。」と主張する。

他方、ベトナム人店主は「隣近所との“和”を保つことができなくて残念だ。4年間営業してきて思い入れがあるものの、引っ越さざるをえない。

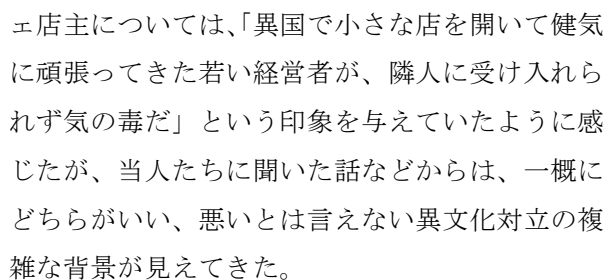
この店は、コロナの影響でアルバイトの仕事がなくなったり、帰国できずに行き場を失って不安や寂しさをかかえる同胞の若者たちの拠り所だったのだが——。日本人には異国で暮らす外国人のストレスや心情を理解し、もっと寛容になってほしい。同じ空の下で生きているのだから。」と訴える。

テレビ画面に映る女性を見ていた私は、(あれ？  
似ている。もしかして——) との思いがわき確  
認したところ、なんと従姉だった！新宿に住んで  
いることは聞いていたが、年が離れていることも  
あり、つきあいがなかったのだ。よりによって親  
戚の隣人トラブルの相手が、私の長らく暮らして  
いたベトナム出身者だなんて——。番組を見た  
後、私は2度にわたって現地へ出向き、従姉宅、  
隣のカフェ、そしてカフェ店主が新規開店準備中  
のベトナムレストランを訪ね、双方から話を聞い  
た。店主や店員には「ベトナムで10余年にわたっ  
て生活していた日本語教師」と自己紹介し、むろ  
ん、紛争相手の親族だなどとはおくびにも出さな  
かったのだ、警戒心を持たれることなく率直にい  
ろいろ話してもらった。

番組では、「郷に入れば郷に従え」と主張していた隣人について、「コロナ禍で困窮し、孤独感を抱く若者たちの拠り所の役目を果たしているカフェの物音や店側の対応に、いちいち目くじらを立てて過剰反応する“狭量な住民”」という印象、カフェ



新宿の大久保通り



従姉の家のある辺りは大久保通りから入った路地のひとつで、駅から近く便利なところだが、もともとは住宅街で高齢者が多く住むという。そこに近年韓国レストランやベトナムカフェのようなアジアの飲食店が進出して来て、人の往来も増え、雰囲気ですっかり変わってしまった。これを活気があって喜ばしいとみるか、閑静な住宅街が浸食されて、住民の平穏な生活が脅かされていると感じるかは、立場によって異なるだろう。

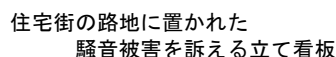
私は10数年前、ベトナムの山岳地帯にある少数民族の村「サパ」をトレッキングツアーで訪れたことがある。観光開発が進みつつある頃で、現地宿泊はホームステイ。泊まった所は伝統的な家の造りだったが、衛星放送が見られ、家電製品は一通りそろって、車まであり、英語を武器に外国人客の受け入れで、かなり潤っているなど感じられた。村内を散歩しているとき、伝統衣装の制服を着た小学生のグループに出会い、かわいさのあまり、写真を撮らせてもらおうとしたところ、頑なに拒否されて驚いた。さらに、民家の庭先に藍染めをしたばかりの布地が干してあり、それに興味を引かれ見せてもらおうとしたが、家人の冷たい視線を感じて断念——というような経験をした。観光で利益を得ているのはほんの一部で、一般住民は自分たちの生活を不躰な外国人に覗かれて迷惑だと感じているのだろう、と痛感したものだ。同様に、新大久保が観光地化されて、よそから若い客がどんどん流入するのを歓迎しない高齢者もいるに違いない。

新大久保の従姉の話では「ベトナムカフェの夜

遅くまでの騒音公害によって、自分だけではなく、  
 辺りの住民みなが安眠できずに悩まされている。  
 以前、連名で行政に取り締まりを求める要望書を出したが、有効な手を打ってもらえなかった。」とのことだ。カフェの店主は「隣家とのトラブルは、自分がここにカフェを開いた時に、きちんと挨拶をせず、その後も理解を得られる努力をしなかったことに一因がある。」と率直に認めていた。

日本人とベトナム人の騒音や「迷惑」に対する感覚の違いについては、ベトナムで生活していた頃、折々に感じたものである。ベトナム人に限らず、文化や社会慣習を異にし、常識の物差しの違う外国人に「隣人」として接するには、時に軋轢も生じる。そこに世代間ギャップが加われば、なおさら理解し合うのは困難だ。

あれから半年後の4月に訪れたところ、例のカフェは閉店していた。区役所など第三者の仲介で関係性を修復し、「平和共存」に至るとはいかなかったようだ。ボタンの掛け違いに始まった個人的体験から、従姉の心にいったん植わってしまった他国人に対する悪印象を払拭するのは容易ではない。これが長期固定化すると、「～～人は」というステレオタイプの民族評価、ひいては偏見につな



がりかねず、「残念」の一語に尽きる。彼女は、生き馬の目を抜く新宿・歌舞伎町で事業を営んでおり、脅しや不当なことに黙って屈するような柔な人ではない。自分のなかにある「倫理観」や「社会常識」から、「非常識」な人間を許せないという気持ちで即行動してしまうのかなと推測しているところだ。

ベトナム人店主の方は、心機一転(?)新大久保の駅近くにカフェを再開店するべく物件を押さえているという。彼は、弱冠32歳にしてすでに韓国レストラン、ベトナムレストランも経営しており、さらに不動産事業、外国人向けの職業斡旋事業にも手を広げているとのことだ。このコロナ禍の日本にあって、彼の事業意欲は留まるどころを知らず、その才覚とバイタリティには驚嘆するばかりだ。日本語も堪能だし、彼も決して柔な人ではない。ベトナムから家族を呼び寄せて、この地に生活の根を下ろしている。そうであるならば、日本人に寛容さを求めるだけでなく、彼自身も日本人のメンタリティや日本社会についての理解を深め、協調・共存への努力も必要かなと思う。

番組では、新大久保で長く商売をしてきた親しい韓国外資事業者が彼のカフェを訪ね、「“三密状態”はよくないよ」とたしなめ、「新型コロナの感染予防対策として入店客の検温をしたり、衛生管理をしっかりとやっていることを周囲にアピールするために、店のドアにその旨を書いた張り紙をしたらどうか」とアドバイスするシーンがあった。騒音

問題については、聞いていなかったのか、滞在したのが昼間だったので、気がつかなかったのかもしれない。言及がないのはいささか残念だった。

いろいろな考えの日本人、いろいろな背景をもった外国人が隣人になる時代、互いの「異文化ギャップ」を「カルチャーショック」「異文化摩擦」ととらえてストレスに感じるか、それともギャップを楽しめるか——と問答してみても、ゴミ出しや騒音、喫煙のようなシリアスな問題においては、とうてい日本人側が許容できるものではない。ならば“郷に入る”側に日本のルールやマナーを理解し、守って行動してもらうには、頭ごなしの「クレーム(苦情・文句)」よりも、一歩ひいた「声掛け」を何度も何度も粘り強く行う。いわば“郷に従ってもらうための努力と忍耐”が迎え入れる側に必要なだろう。あるいは、上記の実例のように、外国人事業者や居住者の“先輩”からの、経験に基づく指摘・助言の方が効果的なものかもしれない。



アパートのゴミ集積場に貼られた  
中国、台湾、韓国系住民向けの注意書き